

T・S・エリオットの能動と受動

増谷外世嗣

今世紀前半の英國文學の展望を、その一斷章からではあるがふりかえってみると、その迂餘曲折の廻轉が、その世界の兩極に二人の巨人T・S・エリオットとD・H・ローレンスを頂いて旋廻した小宇宙であつたかのような現象を見逃すわけにはいかない。それは一面、同じ處をどうどうめぐりした長い迷夢のような場合もあつた。しかし、ともかくもこの二人の巨人の歩んだ巨大な足跡が——それをよしとするか否かは別として——他の多くの小さな諸々の文學的可能性の萌芽を消し去って行つたかのような感さえまぬがれない。ところが、一九五〇年をすぎた今では、その小宇宙の旋廻が強い遠心力と求心力を持って大きく膨脹し何處かへ飛び出そうとする力を自らの中に包藏してきたかの感も亦まぬがれない。この最後の立場に立とうとする私に強い確信を與えてくれた二

人の批評家がいる。F・R・リーヴィスとS・スペンダーである。しかしこのことはこの二人のうちの何れがエリオットの味方であり、ローレンスの敵對であるかというようなことを暗示するものでは毛頭ない。ともかくも先述の小宇宙の中に旋廻しながら、次第に膨脹した力がその小宇宙から脱出し、或は脱出した後の別な引力にひかれる新な軌道を求めようとする別な可能性がその小宇宙を蹴り立とうとする力であるということである。かつて *New Bearings in English Poetry* においてはT・S・エリオットに對する綿密な批評と絶大の稱讚を與えたりリーヴィスが、そのD・H・Lawrence研究において、T・S・エリオットと眞正面から衝突した。ローレンス解釋の面についてである。(しかし、このことについては、筆者は本學研究誌「アナリス」において主として扱つたのでこゝで

は割愛することにするが、この小論には是非必要な部分で、あわせて参考にしていただきたい。

T・S・エリオットが今世紀初頭、十九世紀浪漫主義から、アーノルド・ペイターに衝突し、更にはアーヴィング・バビットの『ニュー・ヒューマニズム』を批判し、『ハムレット』を失敗作と論じ、『異神を追いて』ではD・H・ローレンスを無視しようとした。エリオットは十九世紀から二十世紀に及んだ文學における個性表現に眞向から終始一貫して對立した。そしてその衝突の仕方は、それらの内部の中に培養されながらやがてその内部の矛盾と衝突するというようなものではなく、全く外部からのより強大な巨體を以てした正面衝突ともいふべきものであった。

例えば、バビットの、一切の外面的支柱を取拂つてあくまで個から出發して求めていったヒューマニズム、に對するエリオットの批判の立脚點は次のようである。

「ヒューマニズムは宗教に取つてかわるものであるか、或はそれに隸屬するものであるか、その何れかである。私の考えではヒューマニズムは常に宗教の強力な時に最も榮える。もしヒューマニズムが反宗教的で

あるか、或は少くともその土地と時代の宗教的信仰に對立している場合には、そういうヒューマニズムは純粹に破壊的である。何故なら、それはかつて、それが破壊したものに代るべき何もかも發見したことがないからである。勿論、如何なる宗教も常に單なる儀式と習慣——儀式と習慣は宗教には本質的なものであるのだが——に固定化してしまふ危険はある。それはただ感情の覺醒と清新な獻身或は批判的理性によつてのみ更新され新鮮にされる。この最後の批判的理性による役割はヒューマニズムのものかも知れない。しかし、そうすれば、ヒューマニズムの機能は、必要ではあるが第二義的なものとなる。ヒューマニズムそのものを宗教とはなし得ないのである。

バビット氏が、一面において試みていることはヒューマニズムを——氏の自己流のヒューマニズムを——宗教なしに活動せしめることである。」

まことに理路整然として假借なき批判である。そしてこの批判に對すると、バビットのヒューマニズムが如何にも根據なき個人的熱病のようになさえみえる。ただしその場合はあくまでエリオットのいうような宗教を信仰す

る場合においてのみではあるが。そしてたしかにエリオットはその通りの主張をしているのである。バビットのヒューマニズムのみならず、すべてヒューマニズムとは要するに個人の恣意的な理性の働きにすぎないとしているのである。バビット自身嚴肅な良心的な清教徒であり、彼ほどにキリスト教から佛教や東洋の宗教にまじめに通じていたものは私の知る限りでは見當らないし、又その事實はエリオットもみとめている。だがバビット自身の努力は、如何なるものでも個人より「以前の、外部の、上位の」權威によっては支えられない者の努力であった。「今猶外的權威の原則を固守している人と私は争わない、私はそういう人を問題にしているのではない。私は私自身徹底的個人主義者であり、私自身の如く現代の實驗に永久に身を委ねた人々に對して私は書いている。」しかも尙合理的の自我には満足しきれずそこから自らを昂めようとする努力がバビットのヒューマニズムであったのである。バビットの主張は、あらゆる外的拘束が矛盾を藏し、あらゆる價値の崩解してしまった現代人の最大公約數的知性が、その内的必然性をふるいおこしてその連續をたどりつつ、しかも形への結晶を悲願した

努力の過程である。高きに昂ろうとする努力の過程である。その個の求める信仰の基底と核心をヒューマニズムに求めたのである。バビットのヒューマニズムは形であり過程である。だがエリオットはこの態度をこそ非難する。バビットがその個を昂めようとするその高きが何であるかを詰問する。選擇の自由をもエリオットは赦さない。彼にとってヒューマニズムとは個人の恣意によつて定着させられた勝手なボタンにすぎないのである。その「昂き」とは、その人間のすんでいる土地と時代のうけついでいる傳統の核心をなす正統宗教でなければならぬのである。それはいわば個が生れるまえにすでに存在している個の外なる地模様(outside pattern)なのである。しかし彼はそのアウトサイド・ボタンという表現はとらない。彼はそれを歴史的時間の渦流においてとらえている。それが傳統の觀念である。そのボタンが定着したボタンとしてとらえられていると解されてはならないからである。

エリオットは更に續ける。「政治形態が益々民主的になり、王位・貴族・階級の外的抑制が消滅するにつれて、最早、權威や慣習的尊敬によつては統制されない個

人は、自らが自分自身を統制すべきことが除々に必要になってくる。そこまではバビットの教義は明かに確乎不拔の眞である。しかしバビット氏は又正統宗教の『外的』抑制が弱まる時、個人が自らに加える内的抑制によって補われると考えているようである。もし私が彼を正しく解したとすると彼はこうして新教の板で舊教の臺をこしらえようとしているのである。この理論は確にエリオットの場において成立することである。人間はその内的抑制によっては支えられるものではなくて、何處までも外部の正統秩序、正統のカトリシズムにつながれ含まれてこなければ一切が破壊に終り、混亂におち入るといふ外的な一つの絶対秩序を信じる者でなければ出来ない批判である。そうしてエリオットのこの頃のものを読んでみると我々は次から次へと正統カトリシズムの秩序の缺けている思想や作品は最も大切なものを缺いているものだと思ひこまされてくる。ここでことわらなければならぬことは、私自身、人間が單純に自己の知的な内的抑制によって秩序が保てるとたやすく主張しようとも思つてもいけないし、又そうかといつて、エリオットのようにバビットに對する確定的な否定的立場もとれないも

のである。普遍が個に優先するか、先行したものであるか、個の最大公約數から普遍が生れてくるものであるかはしばらく哲學的問題にゆずることにしよう。たゞエリオットはバビットと正面衝突することによって當時の個人主義の限界を指摘し、それを眞向から否定しようとしたことを指摘すればたゞる。信仰における個性主義の行詰りの一打解としてその態度は正當な必然性をもっている。だが何か疑問がのこる。エリオットはその疑問を豫想したかの如く自問自答している。

「宗教の訴えんとする所は、人の行爲ではなくて靈である。もし宗教が人間の自我を動かして、警官や牧師に依つて統制される代りに自ら自分自身を統御するのでなければ、宗教はその公けの仕事において失敗したのである。私は時々、バビット氏に組織ある宗教に對する本能的恐怖、その宗教が彼の精神の自由活動を拘束し歪曲するのではないかという恐怖があるのではないかと疑う。もしそうならば、氏は確に誤解している。」

誤解であろうか、しかりとすればその誤解を私も確にもつてゐる。多くの批判力をもつてゐる現代人ならばおそらく「組織ある宗教」への疑惑と恐怖を抱かない者が

いるだろうか。それに又幾多の「組織ある宗教」による恐ろしき諸事實も歴史は證明してゐるではないか。この「誤解」は現代的知性の必然系である。エリオットが如何にしてこの誤解をとき去ったか、彼はそれを散文の中では語っていない。この「誤解」の彼方に正統をみるためには現代を超克しなければならぬ。容易な業ではない。エリオットはそれをとげたのかも知れぬ。しかしその超克の過程は彼の散文の中にはよく語られていない。恐らくそれを最もよく語っているのは彼の詩である。といふよりはエリオットにとっては詩のみがよくその至難の業をとげ得るものであったからである。彼にとって現代の超克こそは精神の、魂の、「靈の問題」によるのであって行爲にはよれないからである。こゝにも彼の詩が宗教と結びつかざるを得ない一つの理由がある。『Prufrock Poems』においては人生の老患的倦怠やつまらなむ、*The Hollow Men* では空洞のような虚無、*The Waste Land* においては死の國、岩地、骨灰の恐怖の姿でしかとえられない現代の生を見た彼は、やがて生への復活を「シャーンティー」や *Asht Wednesday* の中で宗教的平安の中に求めた。それらは正に現代に於けるダンテの『神曲』

版にも匹敵しうるものである。『プルフロック』は正に「七十の人の生命の行程に、正しき道を失ひしものの、とあるうす暗き森」にふみこんだかの如き詩ともみられ、『荒地』は正に現代の「地獄篇」。『聖灰水曜日』や『四つの四重奏』は「煉獄篇」から「天國篇」にあたるものともいえよう。詩において成功している彼の宗教との結びつきが、しかし散文においては極めて拙劣である。

「宗教は靈の問題であつて行爲ではない」といふ宗教觀はよしとしても、それでは精神の行爲への普遍的で現實的な結びつきを悲願するヒューマニズムに如何にして宗教が優先するか、エリオットの説得は極めて獨斷で人を納得させない。散文の中で彼が傳統、正統宗教を説く場合に私は彼の教祖的性格に反撥せざるを得ない。

『異神を追いて』の中で彼のいう傳統とは次のように規定されている。それは幾世代にもわたつて存続された諸々の習慣的な行い、宗教的儀式から、見知らぬ人を迎える慣習的な挨拶に至る行い、であり、それは「同じ場所にすむ同じ人々の血のつながり」を現しているものである。我々の現代的な考え方からすれば、それはむしろH・リードの主張する character にあたるものを想定す

る。それはむしろ後天的に人間が身につけるものであり、そしてその character 以前に personality というか *ego* というものが先行していると我々は考える。つまり先験的なものとして考えるフロイド的な考え方を、科學や哲學としてよりも、むしろ當然の事實として受け入れている。しかしエリオットにおいては、この character を形成して行く環境や文化の模様である傳統が、personality というよりは個に先行しているのである。現代的意識への眞向からの衝突である。しかしその傳統とはとりもなおさずキリスト教正統であるという結びつきについては次のようにしか規定していない。

As we use the term *tradition* to include a good deal more than 'traditional religious beliefs', so I am here giving the term *orthodoxy* a similar inclusiveness; and of course I believe that a right tradition for us must be also a christian orthodoxy.

これによって我々は彼の傳統の觀念と正統キリスト教との結びつきの理由が一應圖式的にはとらえることが出来る。しかし彼は如何にして彼自身の個がこの正統キリ

スト教という傳統に歸依して行ったかという個人の内部的必然系については評論、散文の中では全く語らない。事實そうであったのか、或はそうであったものを故意に語らないのか全く不明瞭である。恐らくはそうであったとしたら、彼は故意に語らなかつたのである。恐らく彼は個としても世界としても現代の混沌を知りつくしていた。その混沌に苦しむ孤立した個人を知っていた。人間個人の内部においても、外部とのつながりについても混沌の渦流にある現代を歌つたものが彼の初期の作品である。しかし彼はこの混沌に先行した *order* を求めたのである。その秩序の世界を、個の發見した傳統の觀念で語ればやはりそれは個の發見した恣意的な傳統の觀念でしかなく、エリオットの意圖した個人主義、個性主義の完全否定にはならなかつたのである。こゝに彼が、先に引用した英文のような方法で、個の探究した思想や信仰や作品とは全く無縁のアウトサイド・パターンなるキリスト教的傳統を文學批評の食卓にどさっと持ち出す一種のからくりのようなものが感じられる。それは或る意味においては有無を言わせないものである。彼の評論は、詩は個性の表現であると考える詩人や批評家達への激しい攻

撃である。その點までは、個人的なエクセントリシティを歌う詩的表現をおさえるものとして彼の主張は文學的に正しい。だが、同時に、彼は傳統の擁護者として登場する。その結果は、彼の多くの評論の中で眞の傳統のない手としての詩人として彼がほめている詩人は、ダンテ、ミルトン、ドライデン、ボープそしてボードレールのみということになる。シェリーやローレンスは非傳統的な或は非正統的な詩人であつて問題にならないのである。Sacred Woodなどの議論の仕方には確に人を納得させるものがあるが、その意圖については甚だ疑問が残される。スペンダーがその Destructive Element の中でエリオットを攻撃したのも實はこの點についてである。或る彼の純粹な文學批評の中では、彼は(傳統正統宗教)の圖式は直接には出さずに、ただ傳統という言葉によつて、彼は化學式の元素のように傳統がなかつたら詩人は存在しないと證言する。彼によれば眞のよき詩にとつて傳統は不可缺の條件であり、或る詩が他の詩よりすぐれていると判断する規準もそれが傳統的であるかないかということである、と取るより仕方がなくなる。そして事實エリオットはそういう意味に傳統的という言葉をつか

っているのである。だがエリオットは讀者がこういった使い方を悟られるのが嫌らしい。このことについてスペンダーの批判とエリオットの主張を並べてみよう。

S「もし良い詩が悪い詩よりいっそう傳統的だといふなら、傳統的という言葉の用法はとたんに疑わしいものになる。なぜなら、はっきりしているのは、優れた詩の多くが學んでえられたものではないからだ。この點が彼にとつても面倒なので、早速彼はひとを煙に巻くような、また一方では愚弄するような口調を採用してくるのだが、こうした態度は彼が自己に確信のないときにとる典型的なやりかたである。讀者は傳統とはシェイクスピアのような眞に偉大な詩人が獲得しなければならぬものと考えたりして、彼の愚弄を買うのである。もしこの點を論争でもしようものなら、偉大でない詩人ほど傳統的なものへの感覺を得るために、精出さなければならぬ、といったふうの言葉でピシヤリとやられる。」

E「傳統は……生れながらに與えられるものではない、もしそれを欲するならば、大いに努力してえなければならぬ。まず第一にそれは歴史的意識をとま

うものである、それは二十五歳を超えてなお詩人であろうとする者にとっては、ほとんど不可缺といつてもよい意識である。」

S.「汝の名がシェークスピアでもなかったならばあえてこれに關して論ずる勿れ、とでも彼はつけ加えることであろう。」

まさにその通りであるが、彼が自己の立場を變更したという事實はなお残る。彼はヘンリー・ジームズのようにイギリス文學全體を相手に批判しているのではない、もっとも人がそう考ふる餘地だけは残しているのだが。彼が實際に云っていることは、悪い詩は傳統的でない、良い詩は傳統的だ、というにすぎない。

そのうえ彼は詩人を吟味して、その詩人が非傳統的であるのを發見する方法はないことを認めているのだから、『非傳統的』という言葉は一般に認められている詩でたまたま自分の氣にくわない、たとえばシェリーのような詩人に悪態をつくためにとっておく用語となつてしまふ。個人的好みを擁護するにしていささかご丁寧なやりかたである。」

エリオットは二十歳代に四十の感覺を現す『プルフロ

ック』を書き、四十代には六十の感覺を現す『聖灰水曜日』を書いている。暗さというよりは灰色と漠然性が續いている。死の國の岩間からひねり出されてくる「ライラック」の花や、「年改まる新春に現れる猛虎キリスト」ぐらいではエリオットの詩全體に流れる老いの色、エーテル的色彩はどうにもならぬ。情緒多き青春に別れを告げ、老へ、死へ、死の彼方の平和へと急ぐ個人的好みをもつて、個性からの、ヒューマニズムからの超脱と言われたのでは、現代のシェリーたるスペンダー黙つてはおれぬ。エリオットの詩の中に具體的に見出される傳統とはなにか。Bible, Devine Comedy, The Golden Bough 或は From Ritual To Romance などの書物からの引用であるともいいたくなるくらいである。たしかにこれらを讀まずしてエリオットの詩は成立しないし、又讀むこともできない。ローレンスのような、土と、木の幹と、芽と、男と女、の血のつながりから汗となり形となつてくる傳統とは、本質的に異っているのである。

私はエリオットの詩と、ローレンスやスペンダーの詩との優劣をこゝで批評することが目的ではない。言いたいことはエリオットのような態度が詩の可能な唯一の場

であるというようなエリオットの態度、そしてそれに迎合して行く、インテレクチュアル・スノッバリ、これとしても、文學の可能性を一方的に奪うものとして難詰せざるを得ないのである。

私のエリオット批評の態度の中に、何かエリオットを皮肉らうとする戲畫的なふまじめな態度があるといわれるかもしれない。ここで私はエリオットの人生觀、詩觀のすべてを集大成したとも言ふべき *Four Quartets* を論じて小論の目的をはっきりさせよう。

Time present and time past

Are both perhaps present in time future,

And time future contained in time past.

If all time is eternally present

All time is unredeemable.

What might have been is an abstraction

Remaining a perpetual possibility

Only in a world of speculation.

What might have been and what has been

Point to one end, which is always present.

時時刻刻に廻轉して行く時間を、過去、現在、未來の

渦流的發展でとらえたこのエリオットの態度は既に彼の評論「宗教と文學」の中でもみられた彼の人生批評、文學批評の基底でもあった。歴史的時間として現在を把握した場合、何人も時時刻刻に過ぎて行く現在にはらまれる過去性と未來性を否定することは出来ない。過去が蔽っている過去性と現在性、そして現在を通して未來へと向う過去の未來性、そしてそれらを一點に集めて廻轉して行く永遠の現在、そこに廻轉して行く歴史的世界を詩の冒頭に呈示してくる。ここで私は奇妙な批評をしなければならぬ。個我の内部にある混沌を何らかの調和におさめようとして詩を讀もうとする讀者——そしてこういう讀者が現在では尙多數であると私には思われる——がこの『四重奏』の開卷第一頁に感じとるものは、恐らく悪くいえば月並な、良くいえば正統的な歴史的時間の哲學をつきつけられたような氣がするであろうことである。それは我々の現在生きている感覺の世界を無視するというか、一跳びにとびこしてしまったような感があるのである。何か我々の極めて卑近な具體や經驗からは程遠い、いやむしろそれらを無視してしまつたような感を受けするのである。そしてエリオットは明に卑近や經驗

や知識をしりぞけているのである。もっと明確な線を出
すならば、『四重奏』は明に、個我の世界に先行する非我
の世界のオーターというか掟を呈示しようとしているの
である。それは自我の、個の求めた、バタンの否定である。

You are not here to verify

Instruct yourself or inform curiosity

Or carry report. You are here to kneel

Where prayer has been valid.

君が今この世にあるというのは

君自身の自我をあかすためでも、教育するためでも
奇妙な知識を告げるためでも、噂を伝えるためでも

なす。

祈りがとうとうに妥當している場處に跪くため

君はこの世に生れたのだ。

There is, it seems to us,

At best, only a limited value

In the knowledge derived from experience.

The knowledge imposes a pattern, and falsifies,

For the pattern is new in every moment
And every moment is a new and shocking
Valuation of all we have been.

経験からひき出された知識には、

どんなによくても、限られた価値しかないようだ。

知識は一つの形か模様を課しては偽瞞する、

何故なら本當のバタンは時時刻刻に新しく、

時時刻刻の瞬間は、それまでに過ぎ去ったすべて

の、

新たな愕然たる評價だから。

だが、ここに同様に非我の世界の象徴を「天使」
にした詩人リルケの『ドイノの悲歌』と、この『四重
奏』を比較することによって、スベンダーは *Creative
Element* の中で重要な現代文學の一課題を鮮明にとらえ
ている。『四重奏』の發表されたのは『悲歌』以後二十年
餘りたっている。しかし何れも現代に生きた兩詩人の生
涯をつきつめて、生と死と永遠についての集中と淨化で
あることにおいて、これらの作品は二人の詩人において
同じ位置をしめている。しかし又この二つの作品がねら

った同じところがこれほど相反する場合も亦珍らしい。リルケの發見した「天使」は非我の世界の象徴であるとは言っても、エリオットのな意味においてはあくまでも「我」の世界のものである。「非我」をも包み得るひとつの容器にまで變貌された「第三次元の我の世界」ではあつても、それはあくまで「我」を放棄しているのではなく、それはリルケ的經驗の發展、培養の世界に現れた「天使」である。リルケはポーランドの翻譯者にあててこう書いている。「天使はわれわれ人間が遂行しつづつある可視的なものの不可視的なものへの變貌がすでに完成しているものである」と。これはリルケが自己本位の人間だということではない。『ドイノの悲歌』の「天使はリルケが激しい情熱をもって參與したもろもろの經驗の連續性から彼の魂をかき集めようとした課題を背負う超現實である。」その非現實を現實へ突き出し、そして又逆に或る時は、そこから防衛する天使である。それは捕捉し難い諸々の經驗の中にある不可視性を可視の形に生誕させる力を信じた詩人の發明である。リルケの「我」と「非我」の結びつきは、その「詩作の原理が、すべての經驗を自己のうちに吸収することによってのみ、その

經驗を自己を超えたものへ變轉させることが出来る」詩人のそれである。「世界が世界へ返却されるのは彼がその世界を自己の想像力の創造過程を踏み留らした後のことである。自我の負擔はなるほど最後には天使に委ねることができる」のである。その天使がキリスト教正統の天使ではないことは勿論である。思えば、それは近世に於ける「我」の自覺から個別化の過程の一途を辿った歴史の中で、それが喜びであり悲しみであり苦惱でもあった運命を背負って、自らも孤立化した思想家や詩人が探り求めた非我の世界であり、そしてそれによって人々の個立化を結びつきの調和の世界へもたらそうとした非我の世界でもあった。しかし、それらをこそ誤謬とし、そこには救いなきを暗示し、それに答えを與えようとするかの態度をとる信仰の、詩人がエリオットでさえあるように思われてくる。先に引用した詩の數行はバビットへの答でもあり、リルケへの答でもあるかのようなのである。だが、エリオットは既に一九三〇年に『聖灰水曜日』において、「I」を主語にして祈りと平和の世界へ入るとした。

Because I do not hope to turn again

Because I do not hope

Because I do not hope to turn

Desiring this man's gift and that man's scope

I no longer strive to strive towards such things

(Why should the aged egle stretch its wings?)

Why should I mourn

The vanished power of the usual reign?

.....

And pray to God to have mercy upon us

And I pray that I may forget

These matters that with myself I too much dis-

cuss

Too much explain

.....

Teach us to care and not to care

Teach us to sit still.

この世の現実的な願いは一切すてて、祈りの世界へ入ろうとする詩の言葉が、明に人間の我ではとらえ難い平和と静けさを暗示しようとしている。しかし『聖灰水曜日』の場合あくまでもそれは「私」が出発点である。勿

論、この詩を、現在のようない問題の場においてではなく、一個の獨立した詩として讀む場合この「I」は極めてストレスの弱い言葉で、そんな我意識の重點になるようなものではないが、言いたいことは、この詩の始りが、「私」はもう現在の希みを希まない——即ち現在の經驗につながる「私」の地模様から脱出しようとするところから始まっていることである。そうして最後に、脱却する祈りが自我とは全く關係のない外なる神を、明に正統的宗教の神を指し示していることである。だが、『四重奏』においては、この「私」は詩の冒頭において消滅しているのである。

『ドイノーの悲歌』の世界は個人の内的ボタンを完成することである。これに反して『四重奏』の場合は、人生の課題も詩の課題も自我の生れる以前にすでに存在するボタンに到達することである。『四重奏』では個我的内的ボタンは殆んど消し去られている。ただここで注意すべきはエリオットはこの個以前の地模様を靜止的なものとは考えていないことは注意しなければならぬ。彼は、過去と未來とが不斷に廻轉する現在において共存するような非靜止的な地模様を極度に緊張した瞬間瞬間に

おぼろげに捕えつらふ心とを繰返し繰返しして行く。

At the still-point of the turning world, Neither
Flesh nor Freshness;
Neither from nor towards; at the still point,
there the dance is,
But neither arrest nor movement. And do not
call it fixity.
Where past and futur are gathered. Neither
movement from nor towards,
Neither ascent nor decline. Except for the point,
the still point,
There would be no dance, and there is only the
dance.
I can only say, there we have been; but I can-
not say where,
And I cannot say, how long, for that is to
place it in time.

廻轉している世界が静止——する點に、肉もなく肉
性もなく、

どこからきたでもなくどこへ行くでもない、その静
止の一點に、ああ舞踏あり。

だが停止もなければ動きもない。それをしも固定と
言うなかれ。

過去と未來の集まる處、どこからでもどこへでもな
昇るでもなく降るでもない。その一點、静止の一點
がなかったら、

ああ舞踏もないだろう。たゞ舞踏のみあるところ、
そこにわたしたちはいた。しかしそれが何處だかも
言えないし、

どれくらい長くかもわからない。なるが故にそれは
時間の中に置かれるのだ。

私は餘りに『四重奏』の中の歴史哲學か、宗教哲學じ
みた部分をとりあげすぎたかも知れない。しかしこうい
った詩的表現は、明に自己脱却をとげて、エリオットの
な正統へのヴィジョンから生れてきたボタンを持たざる
ものにとつては、讀むことも、ましてや作ることもでき
ないものである。彼が東洋の佛心的とみなされるような
「生の中の完全な生の否定状態」とは明に一線を劃して

いる態度は彼のあらゆる詩に終始一貫していることを見極め、又、極めて現實的な意味に於いて、人間的に生き、人間的な愛と憎しみにつながっているエリオットの詩的表現の幾つかを裏返し表返しして、それでも最後に残される疑問というか不満というか、一抹の不安を如何ともしがたいのである。スペンダーにしてみれば、エリオットの辿った「正統へのヴィジョンが現在文明の辿りつつある方向の形で解釋し得ると考えられる點は殆んど見當らない」ということである。エリオットは決して『四つの四重奏』におけるような「輝しい舞踏となるような、時間の外にある愛が、飢死に瀕した人間を救うに近代的技術にとって代るものだというようなことをいっているのではないことは明である。しかしエリオットの思想の行動への實現が歴史の内部において發生するものと考えられるような解釋は殆んど不可能だといわれねばならないと思われる。この反論が極めて素朴なものであることは私も知っている。しかし必ずしも不まじめな問題ではないだろう。エリオットの體系の中核には一つの逆説が潜在している。それは反個性的である。しかもそれでいて、それは確に單獨者の栽培に資するものであるのだ。

たとえ、その單獨者が舞踏の模様に参加せんがためにその個性を脱却することに献身する單獨者であっても決してその單獨者が消えるわけではない。そういえば、一體、人間が生きているという單純で感覺的な價値を毀損するような理論が果して人間を人間らしい生き方に導いて行くかどうかそれは疑わしい問題である。」

この疑問はまことにスペンダーとしては至當な疑問である。スペンダーとしては、ということしかし特殊な立場としては、ということではない。生きるという單純な感覺が死に追いやられようとしている現在の場から脱出して、詩の言葉に、生きる感覺模様を突き出そうとする、しかもその模様が現在のような餓死と機械の産業文明の内部において、現實に働きかけ得る感覺の力を持たせようとする、この苦心をした詩人にして始めて問いかける重大な疑問である。

スペンダーの詩は日本でも即座に入手出来る。ここにはその紹介を割愛して、彼の詩の何れをとつても、青春の感覺が横溢していることを指摘することにとどめよう。それはエリオットやスチヴンソンのような詩的表現の立場からすれば、恐らく over-emotion であり、或る

場合には、一步使い方をあやまればどぎついような固定感情の言葉になるかも知れないものである。しかしその言葉がコンテキストに適切なものであれば、如何なる言葉もどぎつすぎることもなければ、固定感情ともならないのである。もしそうでなかったら、我々は詩的表現に使われる言葉を極度に制限しなければならぬ。エリオットの自己表現の抑制ということは確に詩的表現の可能性を極度に抑制してしまった。知的俗物がこのまねをしようとする。

使いふるされた言葉を慣習的模様から剝奪し、新しいコンテキストに置きかえ、それによって言葉の古きパターンを新しきパターンに鑄なおすこと、これがスペンダーの詩的態度である。彼はそれによって、現實には壓殺され

たようにその動力を失っている人間の生きようとする潜在感覚をよびさまそうとする。詩における、感覚への、潜在感覚へのアップビルという要素を、エリオットは『荒地』以後却下してきた。「却下した」とは私としては最もいい意味に解釋したつもりである。もし「却下」でなくして「消滅」であるならば、エリオットの詩や詩論の一切の支柱は崩解してしまうからである。詩における感覚的アップビルということは、詩の最後の發展の段階ではないかも知れない。しかし、それは詩が如何なる發展段階をたどろうとも、それらとの同時的現象でなければならぬ、少くとも現在の私にはそう思われるのである。

(一橋大學講師)